

Ⅱ 水産面からみた黒潮に関するシンポジウム

主 催 日本海洋学会
水産海洋研究会

日 時 昭和40年4月6日 9時30分～17時

場 所 東海区水産研究所オ一会議室

コンピーナー 佐藤 栄

話題および話題提供者

黒潮の理化学的研究の総観と方向

スピーカー 増 沢 讓太郎(気象庁)
—— 黒潮海流の構造を中心として ——
ディスカッサー 吉 田 耕 造(東京大学)
庄 司 大太郎(水路部)

重要魚類の資源量、分布、集合と黒潮の関係

スピーカー 林 繁 一(他東海水研グループ)
—— 沿岸重要魚類 ——
井 上 元 男(東海大学)
—— ビ ン ナ ガ ——
ディスカッサー 浅 見 忠 彦(南海水研) —沿岸—
三 栖 寛(西海水研) —底 魚—
川 崎 健(東海水研) —カツオ—
堀 田 秀 之(東北水研) —サンマ—
松 井 魁(水産大学校) —ウナギ—

黒潮に関する水産海洋研究のあり方

スピーカー 平 野 敏 行(他東海水研グループ)
—— 沿岸漁場を中心として ——
山 中 一(南海水研)
—— マグロ漁場を中心として ——
ディスカッサー 黒 田 隆 哉(東北水研)

川合英夫(南海水研)

宇田道隆(東水大)

佐藤 栄(東海水研)

1. 黒潮の理化学的研究の総観と方向

増 沢 讓太郎 (気象庁海洋気象部)

与えられた題目について総括的な解説を試みることは、とうてい筆者のよくするところではない。そこで、まず黒潮の調査について筆者が日頃感じていることを一つ二つのべる。それから、戦後の観測で明らかになつた黒潮に関する特性の一例として、その断面構造の一特徴を説明し、さらに、予想外に知識の明確でない現象の例として、黒潮海流系の季節変化をやや具体的に述べることにする。

過去の黒潮調査を率直に反省してみると、資料の多い割合にそれから引き出された知識の方は必ずしも豊富だとはいいがたいであろう。また湾流と比較して、黒潮の方が明らかに多量の観測資料をもっているが、西岸境界流の特性に関する知識に対して、果してどちらがより多く貢献してきたであろうか。黒潮調査と湾流調査とは、歴史的にいつて質的な相違があるから上述の問に対する答はそう簡単ではないだろう。筆者の間違つた見方かもしれないが、過去の黒潮調査の中には、計画立案の折にすでに科学的立場がわきに押しやられて、調査目的が不明瞭になつた場合もあつたように思われる。そのために、その時点においてもあまり役に立たない資料を累積させたにすぎないような調査もなかつたといいきれないように思われる。

過去の黒潮調査の質的内容は、上述のように必ずしも充分満足すべきものではないが、何といてもその歴史は古く継続的であるから、これらの資料を新しい観点から再検討すれば、黒潮の経年変動などについて、今まで気づかなかつた点が明らかになる可能性があるだろう。このようなことは湾流の資料からはあまり期待されないもので、黒潮のルーチン観測のたまものといえよう。いたずらに新奇を追わず、伝統を生かした調査にもそれなりの評価が下されるべきである。

また、気象・海流の顕著な異常現象が世間一般にも注目され、それが黒潮海流系の変動とも関連のありそうなきには、黒潮調査もまた世の関心を集め、その経費なども容易に得られやすい。しかし、いうまでもないことだが、異常現象は正常状態の充分な知識があつてはじめて正しく理解されるものである。ところが、このような目立たない不断の調査に対しては、とかく充分な認識が与えられないように思う。これは海洋学の問題ではなく、科学技術行政のゆが